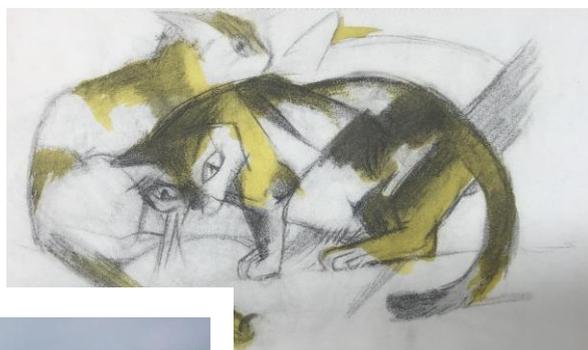


獨協大学図書館 2019 年度貴重書・特別資料展示

「ドイツ表現主義からバウハウスへ」

キュンストラー
— 芸術家たちの足跡 —



獨協大学図書館 2階 貴重書・特別資料展示コーナー

2019年11月25日(月) ~ 12月14日(土)

はじめに

建築・デザインの分野のみならず、ひとつの文化現象として、近代の社会や生活全般に大きな影響を及ぼした「バウハウス」(das Bauhaus, 1919-1933)。2019年は、時代のメルクマール(指標)ともなったこの総合造形学校がドイツ/ヴァイマルに創立されて、ちょうど100年という記念の年にあたります。獨協大学図書館では、これを機に「ドイツ表現主義からバウハウスへ ―芸術家たちの足跡―」と題し、貴重書・特別資料の展示を実施いたします。

この展示では、本学が所蔵する「ドイツ表現主義文庫」から抜粋した関連貴重書をご覧いただきながら、20世紀初頭に現代芸術への先駆的な役割を果たした「ドイツ表現主義」と、当初はその影響を受けながらも、その後構成主義的、機能主義的な傾向を強め、「芸術と技術の新たな統一」を目指す造形運動として、とりわけ建築とデザインの分野で広く世界に影響を与えた「バウハウス」について、今日もお人々を惹きつけてやまないその魅力の一端に触れていただきたいと思います。

獨協大学図書館 特別コレクション「ドイツ表現主義文庫」

本文庫は、「ドイツ表現主義」関連およびその周辺分野の貴重書コレクションである。その核となるのは、1985年にドイツの書店から購入した「German Expressionism Collection」であるが、購入当初735点であった蔵書は、その後の拡充により、現在では1700を超えるものとなっている(拡充にあたっては、本学図書館職員である安保昇氏の長年にわたる尽力があったことを特記したい)。

コレクションの中心は、表現主義の文学作品、たとえばカフカ、ベン、ヴェルフエル、ヒラー、ラスカー＝シューラー、トラーといった重要な作家たちの作品であり、そこには多くの初版本も含まれている。またその相当部分には、作者自身の献辞がある。とりわけ、ラスカー＝シューラーの作品群は多彩を極め、彼女自身の献辞は言うに及ばず、自筆書簡や自筆版画入り限定本までも含む貴重なものである。

さらに、ダダイストやドイツ表現主義に大きな影響を与えた他国の作家の作品のほか、必ずしも表現主義に属しているとは言えないものの、同時代およびその前後の時代の息吹を生き生きと伝える政治的著作家、労働者階級の作家、反戦主義者、平和主義者、ドイツ革命(1918-19年)に関わった作家たちの作品も所蔵されている。

本文庫には、その他にも関連する雑誌、アンソロジー、年報、年鑑、叢書等も含まれており、とくにカンディンスキーとマルクによって編集された年鑑『青騎士』、クルト・ピントゥス編集による『人類のあけぼの』(Die Menschheitdämmerung)、叢書『最後の審判の日』(Der Jüngste Tag)、豪華な文学・芸術雑誌『マルシヤス』(Marsyas)は、貴重な資料である。

図書館蔵書検索(OPAC)で、分類番号「099.321」を入れて検索すると、文庫の書誌データを見ることができ。また、図書館3階には、この文庫に収められている資料のリプリント版や関連資料を集めた「ドイツ表現主義関連資料コーナー」が設置されている。

第1期 「ドイツ表現主義」

11月25日(月) ～ 12月7日(土)

- W. Kandinsky, F. Marc (Hrsg.): Der Blaue Reiter. München (Piper) 1912 <表紙写真 左上>
>「青騎士」によって、1度だけ刊行された年鑑。表紙は、W.カンディンスキーによる。
- F. Marc: Sechzehn farbige Handzeichnungen aus den Skizzenbüchern. Potsdam (Kiepenheuer) 1923 <表紙写真 右上>
>F.マルクによる水彩素描画 15 枚とオリジナル版画 1 枚からなる画集。
- K. Wolff, F. Werfel, M. Brod (Hrsg.): Der Jüngste Tag. Bd.1-86. Leipzig, München (K. Wolff) 1913-1921 <表紙写真 右下>
>「デア・ユングステ・ターク=最後の審判の日」と題された表現主義の著名な叢書。1913 年から 1921 年にわたり 86 巻が刊行された。初期の巻には「新しい文学」というサブタイトルがついており、F.カフカ、G.ベン、F. ヴェルフェルら、表現主義の重要な作家たちの作品が掲載された。
- Th. Tagger (Hrsg.): Marsyas. Bd.1-6. Berlin (Hochstim) 1917-1919 <表紙写真 左下>
>1917 年に創刊された豪華な文学・芸術雑誌。純粋に芸術作品に限って掲載し、リトグラフは印刷ではなく生のまま、作者の直筆サインが入ったものもある。寄稿者には、H. カロッサ、H.ヘッセ、F. カフカ、S.ツヴァイクら小説家の他、P. クレー、E.ノルデ、M.ペヒシュタインらの画家もいる。

第2期： 「バウハウス」

12月9日(月) ～ 12月14日(土)

- W. Gropius, L. Moholy-Nagy (Schriftleitung): Bauhausbücher. Bd.1-14. München (Langen) 1925-1930
>『バウハウス叢書』は、バウハウスの理念と実践を様々な形でまとめたシリーズ。バウハウスがヴァイマルからデッサウに移転した 1925 年から刊行が始まった。初代校長 W. グローピウスと、バウハウスの基礎教育を支えた L. モホイ＝ナジによって企画・編集され、当初は 40 以上のタイトルを予定していたが、ナチによる弾圧によってバウハウスが解体したため、最終的には 14 巻の刊行に留まった。バウハウスで教鞭を執った W. カンディンスキー、P. クレー、O.シュレンマーらのみならず、当時の前衛芸術を担った P. モンドリアン、Th. v. ドゥースブルフ、K.マレーヴィチらも著者に迎え、バウハウスの多様性を示している。「未完のプロジェクト」とも言えるこの叢書は、モダン・デザインの基本書として、現代に至るまで長く読み継がれている。



ドイツ表現主義の先駆的な
芸術家であり、バウハウスの
マイスター（教員）でもあった
ヴァシリー・カンディンスキー
(左) とパウル・クレー (右)

ドイツ表現主義からバウハウスへ ^{キョンストラ} — 芸術家たちの足跡 — 解説編
執筆：山本 淳 教授（外国語学部ドイツ語学科）

【ドイツ表現主義】(der deutsche Expressionismus)

1) 「ドイツ表現主義」とは？

20世紀初頭、ドイツを中心に（ドレーズデン、ミュンヘン、ベルリンなど）起こった反自然主義・反印象主義的傾向を持つ芸術運動の総称。世紀末芸術の流れを受けながら、自然主義における物質的な現実模写および印象主義における外的印象の「再現」に対する反動として、内面的なもの、主観的なものの「表現」を重視した。

2) 2つの芸術グループ：「橋」と「青騎士」

ドイツ表現主義を主導したのは、とりわけ「橋（ディー・ブリュッケ）」(die Brücke)と「青騎士（デア・ブラウエ・ライター）」(der Blaue Reiter)という2つの芸術グループである。

「橋」は、ドレーズデンの工芸学校で建築を学んでいた若者たちによって1905年に結成され、その中心メンバーであるキルヒナー (Ernst Ludwig Kirchner, 1880-1938)、ヘッケル (Erich Heckel, 1883-1970)、シュミット＝ロットルフ (Karl Schmidt-Rottluff, 1884-1976)らが、「生活と芸術の一体化」を目指し、ドレーズデン郊外の湖畔で共同生活・制作を行った。作品には、自然の中での裸体画をはじめ生命力や創造的エネルギーを感じさせるものが多い。全体として大胆なデフォルメと思い切った色使いが特徴で、強い同質性が見られ、地方的、共同体的性格を持つ。

「青騎士」は、1911年、ミュンヘン新芸術家協会内部の抽象芸術を認めるか否かという路線対立から生まれた芸術グループ。中核メンバーは、抽象絵画への道を切り拓いたカンディンスキー (Wassily Kandinsky, 1866-1944：ロシア)、未来派的動物画で知られるマルク (Franz Marc, 1880-1916：ドイツ)の2人。他にもクレー (Paul Klee, 1879-1940：スイス)、マッケ (August Macke, 1887-1914：ドイツ)、さらに現代音楽への扉を開いた作曲家シェーンベルク (Arnold Schönberg, 1874-1951：オーストリア)や小説家・幻想画家クービン (Alfred Kubin, 1877-1959：ボヘミア)らも活動に参加した。伝統的な規範に反発する自由な発想を重視する志向は「橋」と同様であるが、異なるのは、国際性に富み、出身地、年齢、活動分野も多様という点である。とりわけ中心人物であるカンディンスキーが取り組んだ抽象絵画への転換は、色彩やフォルムに対する純粋な関心と呼び起こし、現代芸術への新たな動きを推し進めた。1912年には、グループの年鑑『青騎士』をただ一度だけ発行している。

なお「青騎士」の重要なメンバーであり、抽象絵画への道を切り拓いたカンディンスキーとクレーは、その後「バウハウス」に招聘され教師となる（クレーが1920年、カンディンスキーは1922年以降）。彼らは、モダニズムの実験場ともいべきこの総合造形学校で、さらに新しい芸術の可能性を追求する。

3) 「ドイツ表現主義」の意義

「表現主義」的要素は、ほかにもドイツの画家ノルデ (Emil Nolde, 1867-1956)、オーストリアの画家ココシュカ (Oskar Kokoschka, 1886-1980)、ドイツの彫刻家バルラッハ (Ernst Barlach, 1870-1938)やレームブルック (Wilhelm Lehmbruck, 1881-1919)などの作品にも見られるが、美術の世界で始まったこの運動は、その後分野を超え、文学、演劇、映画、音楽、建築の世界にも広がっていく。

総じて表現主義の芸術家たちは社会的・経済的近代化に伴う人間の主体性の喪失に反抗を試み、主観的、感情的、幻想的、神秘的、抽象的に、新しい世界の到来、新しい人間の誕生というユートピアを希

求する叫びをあげた。その無定形なラディカリズムや、精神や観念の過剰故に多くの批判にさらされ、その運動は 1920 年前後には早くも衰退し始めるが、大胆なデフォルメ、思い切った色使い、抽象への志向を通して、近代の物質主義や自然科学的な因果律の支配に疑義を呈し、従来の美的価値観に揺さぶりをかけた意義は大きい。

その意味で「ドイツ表現主義」は、「モデルネ」(＝世紀末に始まる一連の革新的芸術アヴァンギャルド＝自然主義、印象主義、象徴主義、世紀末芸術、フォーヴィスム、キュビスム、未来派、構成主義、ダダ、シュルレアリスム、新即物主義など)の一翼を担い、現代芸術の先駆的な役割を果たした芸術運動として、今日もなおそのアクチュアリティを失っていない。

【バウハウス】(das Bauhaus)

1) 「バウハウス」とは？

ヴァルター・グローピウス (Walter Gropius, 1883-1969) が総合造形学校「ヴァイマル国立バウハウス」を開校したのは 1919 年 4 月のことである。その後 1925 年にデッサウに移転して市立の造形大学となり、モダニズムの重要な実験機関「デッサウ・バウハウス」として活動を大きく展開した。しかしナチの圧力により、同校は 1932 年に廃校。同年、第三代校長ルートヴィヒ・ミース・ファン・デア・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe, 1886-1969) の努力により、ベルリンで私立の建築学校として「ベルリン・バウハウス」が再開されたものの、翌年 1933 年にナチ親衛隊による強制捜査を受け、活動が困難となる。そして同年 7 月 20 日、最終的にバウハウスの閉鎖が決まった。

その活動期間はわずか 14 年にすぎなかったが、建築・デザイン・美術のみならず文化全体の「近代」を象徴する存在としてひとつのノルム(規準)を形作ったこの総合造形学校は、20 世紀の生活空間の構成に大きな影響を及ぼし続けてきた。バウハウスという名称は、生活の近代化とそれに伴うさまざまな現象を表すレッテルとなり、賛否はともかく、その運動は分野を越え幅広い関心を引き起こした。

2) 「バウハウス」の 3 つの時代区分

バウハウスの時代区分に関しては、グローピウス校長時代(1919-28)、マイヤー校長時代(1928-30)、ミース・ファン・デア・ローエ校長時代(1930-33)という校長の交代時期による分け方も可能であるが、全体的な傾向に基づいて区切った場合、次のようになる。

◇「ロマン主義的、ユートピア的、表現主義的」時代

>1919 年の「ヴァイマル国立バウハウス」創設から 1923 年の第 1 回「バウハウス展」まで。

>バウハウスは、アーツ・アンド・クラフツ運動を嚆矢とする 19 世紀終わりから 20 世紀初頭にかけて起こった広範な芸術改革運動の潮流(たとえば、ユーゲントシュティールやアール・ヌヴォーといった新しい芸術運動、また芸術と産業の問題にいち早く取り組んだ「ドイツ工作連盟」など)を背景とし、第一次大戦後の社会主義革命的な気運の中で産声を上げた。諸芸術の新たな統合、芸術と生活との新たな関係の樹立を目指すひとつのユートピア共同体として活動を展開したバウハウスは、とりわけ初期の段階において、社会や経済の近代化に抵抗するパトスに動かされ、後に「バウハウス様式」と言われるようなモダンな傾向とは違う「ロマン主義的」「ユートピア的」「表現主義的」な様相を示していた。その中心にいたのが、ヨハネス・イッテン (Johannes Itten, 1888-1967) であり、彼によってその基礎が形作られた予備課程では、個人の内面の解放に向けた芸術教育が実践された。

◇「構成主義的」な時代

>1923年の「バウハウス展」を経て1925年にデッサウへ移転して市立の造形大学となり、モダニズムの重要な実験機関「デッサウ・バウハウス」として活動した時代。

>1923年に芸術と産業との連携を推し進めるのか否かでグローピウスと対立したイッテンがバウハウスを去ったのに伴い、グローピウスは新たに「芸術と技術の新たな統一」という綱領を掲げた。同年開催された第1回「バウハウス展」以降、バウハウスは産業との連携を強め、構成主義的、機能主義的、合理主義的な色彩を濃くしていく。そこで形作られていくのは、グローピウス設計のデッサウ・バウハウス校舎やマルセル・ブロイヤー (Marcel Breuer, 1902-1981) がデザインしたスチールパイプ製の椅子「ヴァシリー」などに象徴されるバウハウス像であり、それはモダン・デザイン思想の強固な規範として神格化されていった。

>バウハウスの理念と実践を様々な形でまとめた『バウハウス叢書』(Bauhausbücher) が出版され始めたのも、この時期である。この叢書は、グローピウスと、イッテンの後を引き継ぎバウハウスに新たな展開をもたらしたモホイ＝ナジ (László Moholy-Nagy, 1895-1946) によって編集され、1925~30年の間に14冊が刊行された。

◇「機能主義的」な時代

>創設以来バウハウスの顔であったグローピウスが退陣し、代わってハンネス・マイヤー (Hannes Meyer, 1889-1954) が第2代学長となった1928年以降。

>1927年、マイヤーがデッサウ・バウハウスに招聘され、(バウハウスの最終目標としてカリキュラムに組み込まれるはずであった) 建築工房の設置が初めて実現。1928年、グローピウスが建築家としての自らの仕事に専心したいという理由で辞任し、マイヤーが第2代校長となる。彼は、デザインというものを芸術の側からでなく、生活現象という「社会的なもの」として捉えることで、芸術と産業の新たな統一を図ろうとしたが、グローピウスに比べ、機能主義的、社会主義的な考え方をよりいっそう徹底したといえる。

>1930年、市当局が右傾化したことに伴い、デッサウ市長が、マイヤーを社会主義的だという理由で解任する。

>後任として第3代校長の職に就いたのは、気鋭の建築家として知られていたルートヴィヒ・ミース・ファン・デア・ローエ。彼のもとでバウハウスは、マイヤー時代以上に建築教育が中心に位置づけられ、「建築学校時代」とも呼ばれたが、しかし、その存続もわずか2年余にすぎなかった。

*「バウハウス」の終焉

>1931年、デッサウ市の選挙でナチが過半数を占める。

>1932年9月、ナチの動議により、バウハウス解体が採択される。同10月、ベルリンにおいて、私立の建築学校としてバウハウス再開。

>1933年4月、ベルリン・バウハウス、ゲシュタポの手により封鎖。

>1933年7月、バウハウス解散。

3) 主要なマイスター（教員）たち

グローピウス（Gropius, Walter 1883-1969） *初代校長
イッテン(Itten, Johannes 1888-1967)
ファイニンガー(Feininger, Lyonel 1871-1956)
マルクス(Marcks, Gerhard 1889-1981)
ムッヘ(Muche, Georg 1895-1987)
クレー(Klee, Paul 1879-1940)
カンディンスキー(Kandinsky, Wassily 1866-1944)
シュレンマー(Schlemmer, Oskar 1888-1943)
モホイ＝ナジ(Moholy-Nagy, László 1895-1946)
アルバース(Albers, Josef 1888-1976)
バイヤー(Bayer, Herbert 1900-1985)
ブロイヤー(Breuer, Marcel 1902-1981)
シュミット(Schmidt, Joost 1893-1948)
マイヤー（Meyer, Hannes 1889-1954） *第2代校長
ミース・ファン・デア・ローエ（Mies van der Rohe, Ludwig 1886-1969） *第3代校長

4) その後の「バウハウス」

1930年代に入り、社会の右傾化が強まり、ナチの勢力が台頭してくると、バウハウスの存続も危うくなっていく。ナチが政権を掌握した1933年を前後して、バウハウスで活躍していた芸術家たちのかなり多くが、イギリスを経由してアメリカへ亡命した。

1937年に亡命したグローピウスは、その後ハーヴァード大学大学院に招聘され、建築家の主任教授を務めた。また自らの建築事務所も構え、住宅建築を中心に、アメリカ近代建築の世界に大きな足跡を残す。

同じく1937年に亡命したミース・ファン・デア・ローエは、アーサー工科大学（のちのイリノイ工科大学）に招かれ、ドイツで1920年代に構想していたスチールとガラスの建築を次々に実現していった。

同様に1937年に亡命したモホイ＝ナジは、同年シカゴに設立されたニュー・バウハウスに校長として招かれ、その後1946年に亡くなるまで、先鋭的で独自のデザイン教育を展開した。

ほかにも、リオネル・ファイニンガー（ドイツ系アメリカ人としてアメリカに帰国）、ヨーゼフ・アルバース、ヘルベルト・バイヤーら多くの芸術家たちがアメリカに渡り、その後の近代芸術、近代建築に大きな影響を与え続けた。

5) 「バウハウス」の意義

すでに述べたように、総合造形学校「バウハウス」は、わずか14年の活動期間にもかかわらず、建築・デザイン・美術のみならず文化全体の「近代」を象徴する存在としてひとつのノルムを形作り、20世紀の生活空間の構成に大きな影響を及ぼし続けてきた。そこで生み出された合理的・機能主義的なデザインには「バウハウス様式」という呼び名が与えられ、一方でモダン・デザイン運動のひとつの到達モデルとしてとして賛美された。またその一方で、そのバウハウス様式が生み出した20年代の新建築運動こそが、単調な積み木型の建築や殺風景な大規模団地を増殖させ、人間の生活空間を荒廃させた元

凶である、という非難も生まれた。

実際のバウハウスは、最近の研究が明らかにしてきたように、ひとつの統一的なイメージで捉えられない多様な要素をはらんでいる。確かに 1923 年の第 1 回「バウハウス展」以降、バウハウスは産業との連携を強め、構成主義的、機能主義的な色彩を強めていく。しかしそこには同時に、単に芸術と産業との統一を越えた「生の全体性」への志向が、また機械文明への適応と同時に、それへの批判を育むまなざしが絶えず存在した。バウハウスは、そういうさまざまな要素の錯綜する運動であったし、またそのようなひとつの動態としてそれを捉えなければ、そのアクチュアリティを浮かび上がらせることはできない。

【参考文献】

<ドイツ表現主義>関連

- 早崎守俊：『ドイツ表現主義の誕生』（三修社）1996 年
神林恒道（編）：『ドイツ表現主義の世界 – 美術と音楽をめぐって』（法律文化社）1995 年
土肥美夫：『ドイツ表現主義の芸術』（岩波書店）1991 年
坂崎乙朗：『夜の画家たち：表現主義の芸術』（講談社）1978 年
エーヴァルト・ラトケ（遠山一行訳）：『ドイツ表現主義』（平凡社）1974 年
J. ウィレット（片岡啓治訳）：『表現主義』（平凡社）1972 年
ドイツ表現主義 1『表現主義の詩』（河出書房新社）1971 年
ドイツ表現主義 2『表現主義の小説』（河出書房新社）1971 年
ドイツ表現主義 3『表現主義の演劇・映画』（河出書房新社）1971 年
ドイツ表現主義 4『表現主義の美術・音楽』（河出書房新社）1971 年
ドイツ表現主義 5『表現主義の理論と行動』（河出書房新社）1972 年
ホルスト・イェナー（土肥/内藤訳）：『ドイツ表現派 ブリュッケ』（岩波書店）1994 年
マリサ・ヴォルピ・オルランディーニ（乾由明訳）：現代の絵画 13『カンディンスキーと青騎士』（平凡社）1974 年
など

<バウハウス>関連

- 『バウハウス叢書（全 14 巻）』（中央公論美術出版）1991 年～
M. ドロステ：『バウハウス 1919-1933』（ベネディクト・タッシュェン出版）1992 年
杉本俊多：『バウハウス—その建築造形理念』（鹿島出版会）1979 年
G. ネイラー（利光訳）：『バウハウス—近代デザイン運動の軌跡』（PARCO 出版）1977 年
セゾン美術館：『bauhaus 1919-1933』「バウハウス展」（1995 年／セゾン美術館）カタログ
Bauhaus 1919-1928. Hrsg.von Herbert Bayer, Ise und Walter Gropius. Ausstellungskatalog Museum of Modern Art 1938. Dt. Ausg. Stuttgart 1955.
Wingler, Hans Maria: *Das Bauhaus: 1919-1933 Weimar, Dessau, Berlin und die Nachfolge in Chicago seit 1937*. 3., verb. Aufl. Bramsche 1975.
Droste, Magdalena: *bauhaus 1919-1933*. Köln 1993
Wick, Rainer K.: *Bauhaus. Kunstschule der Moderne*. Ostfildern-Ruit 2000,
Das frühe Bauhaus und Johannes Itten. Katalogbuch anlässlich des 75. Gründungsjubiläums des Staatlichen Bauhauses in Weimar. Hrsg. von Rolf Bothe, Peter Hahn, Hans Christoph von Tavel. Ostfildern-Ruit 1994
など